125　アシアロシンチの血中消失補正肝摂取率LHL/HHの有用性」

河　相吉、山野玲子、中西佳子、池田耕士、菅　豊、田中敬正（関西医大　放）

アシアロシンチの心、肝カウント指標を基に血中消失補正肝摂取率LHL/HHを算定し血中停滞率（%H15）、肝疾患重症度別分類と比較しその有用性を検討した。

57例の慢性肝疾患患者を対象とした。LHL15は%H15の低値域ではその変動と対応せず、機能良好域での分離がHH15よりも低かった。これに対し、LHL/HHは%H15の変動と全区間において直線的な対応関係を示し、機能正常群と軽症群間ではLHL15よりも、また軽症群と中等症群間ではHH15よりも良好な有意差を示した。LHL/HHは正常から軽症域におけるLHL15の判別能を向上させ、中等度障害群の評価においてはHH15に優っていた。LHL/HHは評価指標として有用と考えられた。

126　^{99m}Tc-GSAによる肝機能の評価

奥田逸子、丸野広大、村田　啓（虎の門病院・放）

肝予備能検査である^{99m}Tc-GSAシンチを用いて肝機能障害の評価を行い、その有用性を検討した。

対象は，ＨＢキャリアー４人、脂肪肝３人、慢性肝炎１９人、肝硬変症１３人、ＰＢＣ４人（うち肝硬変２人）ルポイド肝炎２人の計４５例で、ＨＨ15、ＬＨＬ15及びこれらから求めたＬＨＬ15／ＨＨ15などが肝予備能の指標となりうるかを、従来の肝シンチとの比較も合わせて検討した。

肝炎群と肝硬変群では、ＬＨＬ／ＨＨは１以上と未満とに二分される傾向にあり有意差を認めた（1.37VS0.78 P<0.001)。また血小板、凝固、Ch-EなどはＬＨＬ／ＨＨの減少に伴い悪化傾向を示した。このように、定量化することによって従来の肝シンチでは表し得ない異常を指摘でき、肝炎群と肝硬変群の鑑別の可能性が示唆された。

127　^{99m}Tc-GSA使用による肝機能検査の臨床応用

長瀬勝也、竹内信良、桑鶴良平、平野　暁、直居　豊（順大　放）、別府倫兄、大橋　薫（順大　二外）、大谷俊樹（順大　児外）

^{99m}Tc-GSAを用いて種々の肝疾患の肝機能検査としての有用性を検討する。　患者の空腹時に^{99m}Tc-GSA 185 MBq を静脈内に１回投与した。投与直後より１秒／１フレームで１０分間、次で１分／１フレームで３５分、計４５分間収録し、終了後肝のSPECT を実施した。　対象症例はＴＡＥ施行症例、肝硬変、小児ＣＢＡ術後症例等である。　ＴＡＥ症例では本法を施行前後２回施行した。ＴＡＥ施行時に於ける^{99m}Tc-GSAの動態は他の肝機能検査等と比較したが、特に肝予備能検査として有用であった。　肝硬変に門脈圧亢進症を併発した症例、ＣＢＡ術後症例についても本法を施行、肝線維化及び他の肝機能検査と比較検討する。

128　小児における^{99m}Tc-ＧＳＡの肝集積曲線の解析による肝細胞機能の評価

山田　修、石田治雄*、石井勝己**、原　裕子、五条昌行、神谷克己、野本一雄、粟生田邦男、新海龍二、塩入弘和、水上省一、伴　隆一***（都立清瀬小児　放）(都立清瀬小児　外*)(北里大　放**)(島津製作所***)

我々は小児肝疾患者23例に^{99m}Tc-ＧＳＡを用いた肝イメージングを行い、肝細胞の機能の評価を行った。

検査方法は、患児を仰臥位に固定し、検出器を胸腹部前面と頭部にあて、^{99m}Tc-ＧＳＡを小児の年齢に応じた量(37-111MBq) を肘静脈よりボーラス注入した。静注後 4分毎に64分間連続画像を撮像した。このデーターから肝実質にROI を置き、これより得られたヘパトグラムを分析してMTT を算出し、ファンクショナルマップを作成して、局所動態機能を表現し評価した。小児における本法の有用性について報告する。

129　慢性肝疾患のイメージ診断に対する^{99m} Tc-GSA肝シンチグラフィーの有用性

大江　毅、湯村和博、原田　尚（獨協医大２内）、新井和浩、後藤和則、後藤政文（同　放）

慢性肝疾患の慢性度の違いによるGSA 肝シンチグラフィーの画像の変化につき検討した。慢性肝炎(CH)9 例、肝硬変症(LC)11例、および正常対照（NC）8 例、の合計28例を対象とし、^{99m} Tc-GSA185MBq静注後60分までの肝、胆、心、脾の画像を観察し、同時に各症例につきLHL15 、HH15の算出をおこなった。

画像イメージでのLCの診断に対してはRI静注5 分後の早期画像より静注60分後の後期画像の方が診断能は高く、逆にCHの診断には早期画像の方が優れていた。またLHL15、HH15の値を参考にすることによりさらに診断能が高まると思われた。本法は肝の予備能診断のみならず、単純な形態診断においても優れていると思われた。

130　小児領域における99mTc-GSA肝シンチグラフィーの有用性

黒野賢仁、小山雅司、南部一郎、飯田昭彦、大場　覚（名古屋市大　放）

最近市販された99mTc-GSAを用いた肝シンチグラフィーの小児領域における有用性について検討した。　対象は胆道閉鎖症術前2例、術後17例、劇症肝炎、肝外傷、Alagille症候群およびその疑い各1例、計23例である。

画像について、全例とも正面像での肝臓の形態把握が可能であった。機能について、体重の少ない症例にはligand量で1.5mg、比較的大きな症例には3.0mgを投与したが、Clearance Index(HH15)、Receptor Index(LHL15)により、臨床的に肝機能が良好に経過している症例と良好でない症例との分離が可能であった。またSPECTを併用することにより、肝内での集積の分布が不均一であることが明瞭となり、CTなどでは把握できない局所的な肝細胞の障害部位の推定も可能であった。小児領域においても有用な検査法になりうると考えられた。

Presented by Medical*Online